

江戸川ゐのはな会

藤山 嘉信

江戸川区は、江戸川をはさんで千葉県に隣接しているだけに、東京都の中では、昔から千葉医科大学、千葉大学医学部の出身者の多いところである。区内に公立の病院がないので、同窓会員はほとんど開業医であった。医師会設立のころの同窓会員数ははっきりしないが、名簿に残っている昭和40年代半ば頃からは、40人前後で推移している。いろいろと調べてみたり、旧い先生方にも聞いてみたのだが、正式に「江戸川ゐのはな会」として発足したのがいつなのか、正確なところは残念ながら分からなかった。

江戸川区医師会が戦後新しい社団法人として発足したのは、昭和22年12月である。このときに、伊藤理先生（大正9年卒）は設立発起人の一人として尽力されている。また発足後も、理事として長らく貢献された。さらに、加藤峯三郎先生（大正13年卒）は、第2代会長として、昭和24年4月から40年3月までの16年の長きにわたって医師会発展に努められた。また、紅谷庄吾先生（大正13年卒）も同じ時期に副会長として、加藤会長を助けて、大変苦労されている。こうして新生医師会発足の揺籃期に、多くの先輩方が執行部の中枢にいて、江戸川区医師会を東京でも有数の実力ある医師会に育て上げられたことを思うと、後輩として、大いに敬意と誇りを覚えるのである。

その後も、今日に至るまで長年にわたって、卒業生の多くが医師会の中で、重きをなしてきた。会長として、山上健次郎先生（昭和17年専卒）、また副会長は、北沢吉郎（昭和16年卒）、山上健次郎、笠川猛（昭和22年卒）、の諸先生や藤山嘉信（昭和30年卒）が務め、さらには執行部や各種委員会にも、いつも多くの方々为名をつらねている。

こうして、「ゐのはな会員」は、医師会の中では、大きな勢力をなしているが、それだけに卒業生の人数も他を圧している。最近の傾向を見ても、千葉大学＝38名、日本大学＝26名、慈恵医大＝19名、昭和大学＝14名と昔ながらの比率はあまりかわっていない。ちなみに医師会員の数は昭和22年の発足時は121名、それが最近ではA会員337名、B会員206名の計543名となって、東京都医師会の中でも有数の大世帯である。

医師会発足後、同窓生の折に触れての集まりは当然あったであろうが、「江戸川ゐのはな会」としての正式な発足の年代は、はっきりしない。私が医師会に入会したのは昭和43年で、医師会設立後ほぼ20年が経っているが、当時すでに「ゐのはな会」は毎年盛大に行われていた。

会則もできていて、

- 1) 会員の親睦
- 2) 医学部卒後研修
- 3) 会員の慶弔
- 4) その他

となっている。

40年代半ばころの名簿を見ると、ずいぶんと旧い先生方のお名前が載っている。

名誉会員

伊藤 理（大正9年卒）

加藤峯三郎（大正13年卒）

紅谷 庄吾（大正13年卒）

永山富士太郎（大正13年卒）

富塚八十一（昭和4年卒）

今井 知文（昭和4年卒）

津端 泉（昭和10年卒）

会長として、中村民比古先生（昭和13年卒）、会員は昭和13年卒から43年卒まで38名となっている。当時は毎年1回11月頃に総会、懇親会を開き、毎回、30名位の方が参加して大層盛会であった。その後5月頃開催に変更され今日に至っている、会場は当初は「まじま」、その後は長らく「有田」といった区内の料亭が多かったが、江戸川区は広域で、南北の交通機関が乏しいため、会員が集まりやすいところということを考慮して、区内にこだわらず、市川の「栃木家」にしてみたり、さらに最近は、都心に近く「ホテルイースト」、「ホテルレバント」などを利用するようになった。

総会には、毎回、時の学部長や病院長を初め、教授方や学外の関連病院、施設の先生方を2～3名くらい招待して、学内の現況や最新の研究、話題について講演していただいている。この長い年月、今までご出席いただいた方は、それこそ膨大な数に達するのである。招待の先生方も、当初はもちろん私より大先輩の方々がお見えになっていたのだが、同年

輩となり、とうとう、最近では、私から見たら二廻りも下の年代の方になって、まさに隔世の感をがある。

会長は、長らく中村先生が務めておられたように思うのだが、その後は、主に卒年にしたがって、2～4年くらいずつの交代で就任してきた。歴代の会長は、私の記憶によれば、

小竹 稔夫（昭和14年卒）
 小倉 一郎（昭和20年卒）
 笠川 猛（昭和22年卒）
 今井 力（昭和22年卒）
 一志 典夫（昭和25年専卒）
 村瀬 靖（昭和30年卒）
 藤山 嘉信（昭和30年卒）
 伊谷 昭幸（昭和30年卒）
 市川 芳郎（昭和25年専卒）
 岩倉 弘毅（昭和37年卒）現任

といった諸先生だったと思われる。このうち、中村、小竹、小倉、笠川、今井、市川の先生方が、亡くなられている。

「江戸川ゐのはな会報」を発行したこともあったが、平成14年から16年にかけて2回出ただけで、その後は中断されたままである。やはり、掲載記事や寄稿の集まりが少なく、人数から見ても、とても採算が取れないという事情によるものである。

最近、総会の集まり具合が減少気味で、特に若い人達の出席の少ないのが、東京や全国のゐのはな会と同様悩みの種である。「ゐのはな会を盛り上げる会」と銘打って有志の集まりを何回か持って対策を

話し合ったりしたこともあったが、あまり効果は上がっていないのが現状である。

21年度の総会は、5月16日、18：00から、東京、日本橋のロイヤルパークホテルで開催された。招待講演は次の2先生で、演題は次の通りであった。

- 1) 「メタボリックシンドロームと健康寿命」
 千葉大学大学院医学研究院 細胞治療学
 教授 横手幸太郎先生（昭和63年卒）
- 2) 「経口抗菌薬の使い分け」
 医療法人社団 徳風会 高根病院
 副院長 菅野 治重先生（昭和49年卒）

出席者は14名とやや少なめであったが、講師の話は、最近の話題を中心に、大変興味深く拝聴した。折から新型インフルエンザが騒がれている最中で、話題もそれに集中した。やはり気心の知れた仲間同士で、近況報告や、歓談もいつもどおり盛り上がった。若い会員が増えてきてはいるが、それでも、もう少し、昭和50年代卒以後の中堅、若手の方たちの参加があればと残念であった。

最近の会員名簿では、会員数36名。最年長は昭和17年専卒で、大正生まれは3人。また、一方、平成卒も8人と増えてきて若返りが著明である。最新卒年は平成9年で、昭和17年卒の先生とは実に55年の卒年差である。

こうした新進気鋭の、エネルギーに溢れた会員たちがしっかりと先輩方の後をついで、伝統ある「江戸川ゐのはな会」がさらに盛大に発展していくことを期待したい。

（ふじやま よしのぶ）